

2021年11月12日

## 第7章：労働市場の経済学

生産要素： 労働 (L)、土地 (X)、資本 (K)、...

派生需要： 生産のために必要となる需要

cf. 財・サービス：消費のために必要となる需要

生産活動によって国民所得が生み出される

国民所得は労働者、土地所有者、資本家にどのように分配されているか？

各生産要素の「限界生産性」に応じて分配されている！

ならば、各生産要素の限界生産性はどのように決まるか？

## 7.1. 労働市場

労働：

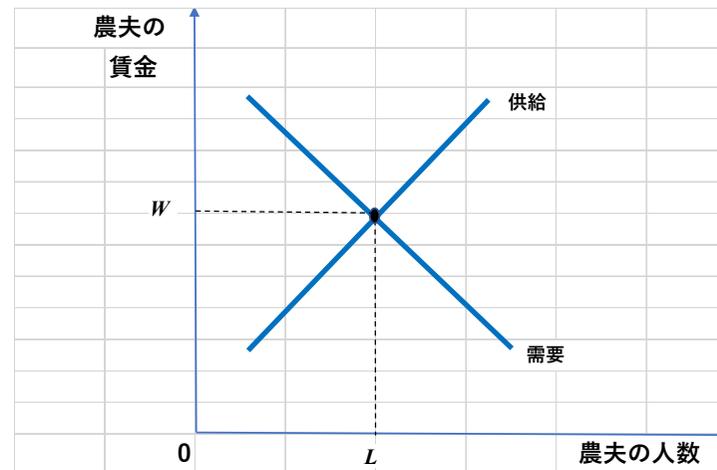
生産要素の代表格

労働市場はたくさんある：

農業工業サービス業、熟練非熟練、男女

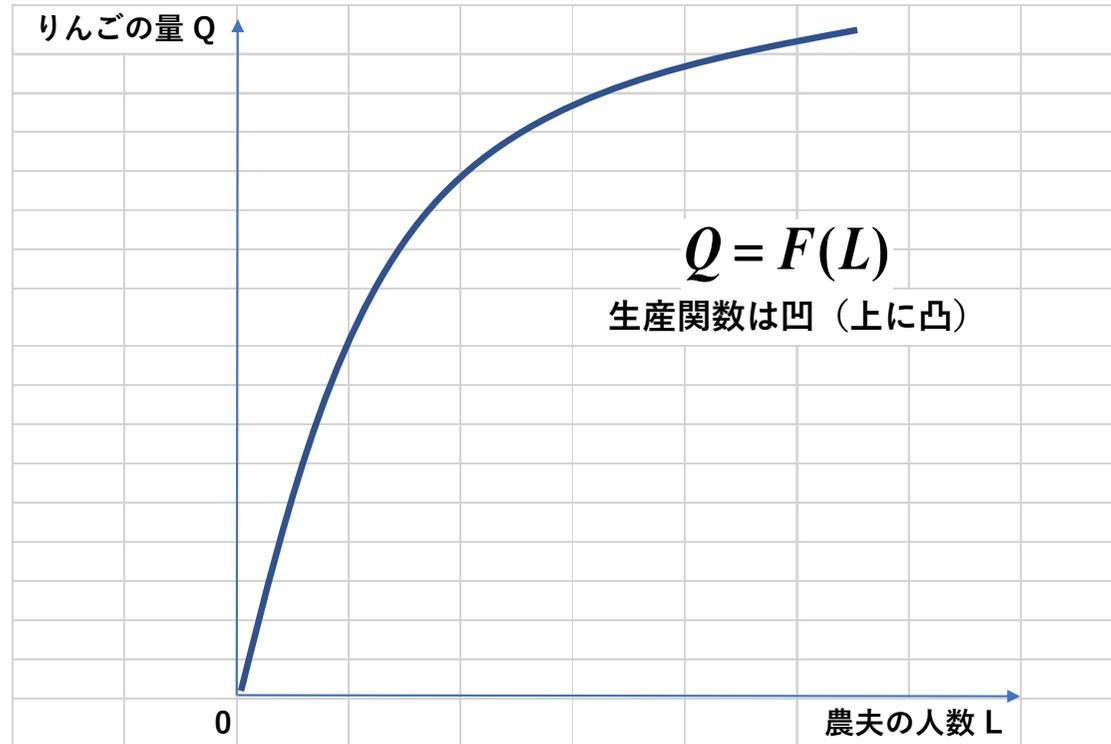
正規非正規 .....

需要と供給の基本的な法則は生産要素にも当てはまる



## 7.1.1. 労働需要

企業の利潤最大化から派生的に需要が発生



生産関数のグラフ（凹）

労働の限界生産性（限界生産物）： 生産関数の傾き

$$F'(L) = \frac{d}{dL} F(L)$$

労働の限界生産物価値： 財価格 × 生産関数の傾き

$$pF'(L)$$

労働限界生産物価値逓減法則（凹）：

雇用  $L$  を増やしていくと限界生産性（生産関数の傾き）は下がっていく

労働  $L$  について利潤最大化 :

$$\max_{L \geq 0} \{pF(L) - wL\}$$

(固定費用省略)

一階条件 :

$$pF'(L) = w$$

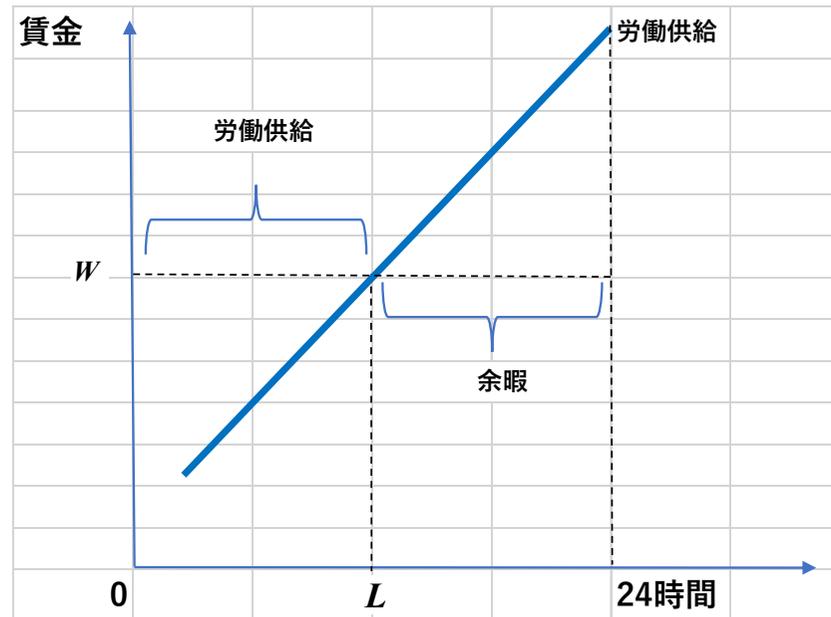
労働の限界生産物価値 = 賃金

## 労働需要曲線シフトの諸要因

- 生産財価格↑      労働需要曲線右にシフト（アップ）
- 生産技術↑      労働限界生産性を高める技術革新：
  - 労働需要曲線右にシフト
  - 道具の進化、分業促進
  - 歴史的にはこちらがメイン労働限界生産性を下げる技術革新：
  - 労働需要曲線左にシフト（ダウン）
  - 技術が職を奪う
  - ロボット、自動化、AI
- 他の生産要素価格↑      労働需要曲線左にシフト

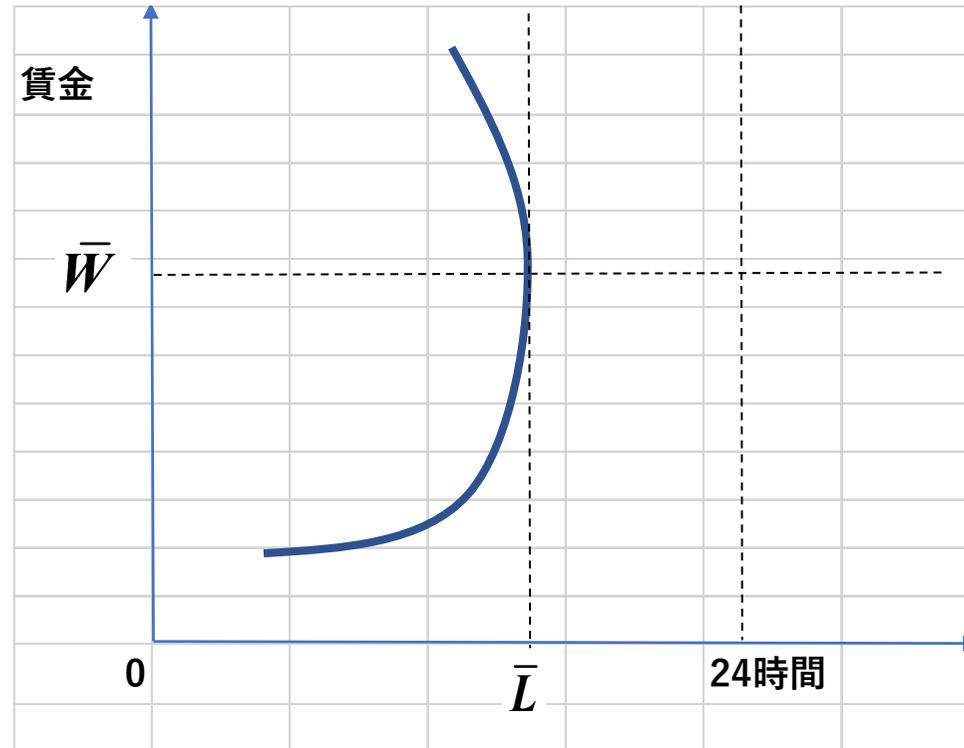
## 7.1.2. 労働供給

労働者は「労働と余暇のトレードオフ」に直面



代替効果：賃金  $W \uparrow$  → 限界時間単位余暇を楽しむより働いて稼ごう  
 → 労働供給アップ（余暇ダウン）

\* 賃金が高い場合、労働供給曲線は反転する可能性がある

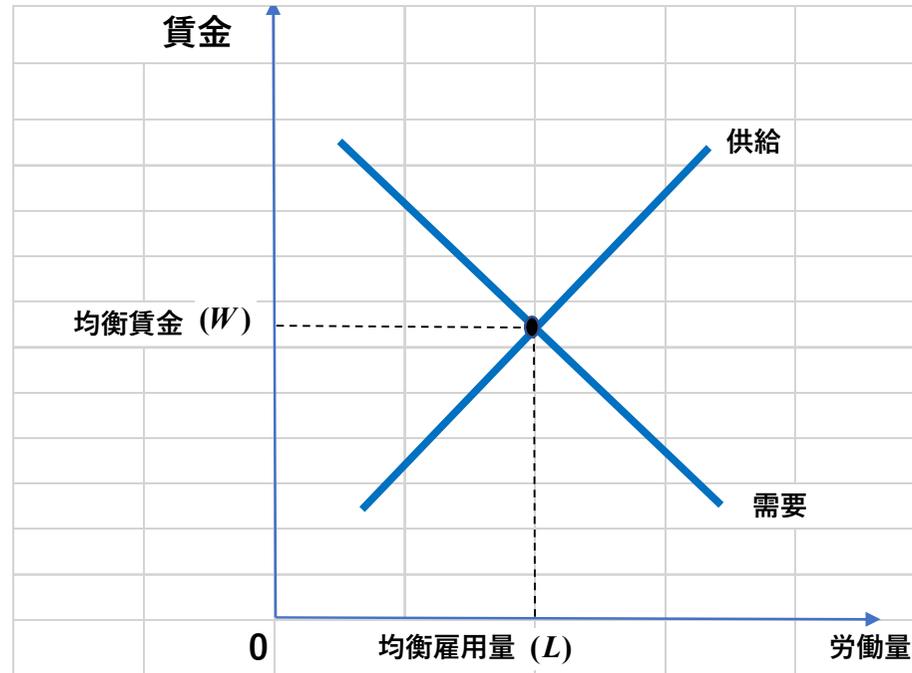


所得効果：賃金  $\bar{W}$  以上に上昇 → 十分所得が稼げている  
 所得アップに魅力ない  
 → 労働供給ダウン、余暇アップ

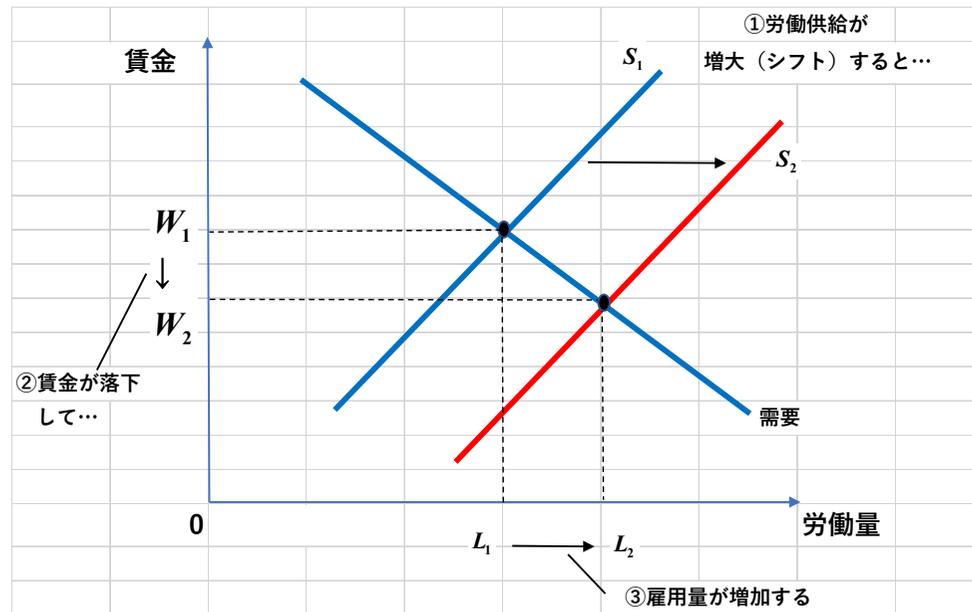
## 労働供給曲線シフトの諸要因

- ・嗜好の変化： 歴史的変遷を経て、女性「もっと働きたい」  
→ 女性労働供給曲線右にシフト
- ・移民の増減： 移民が増えると労働供給曲線右にシフト
- ・様々な労働市場の相互作用：  
農業労働賃金アップ → 工場から農業へ  
→ 工場労働供給曲線左にシフト

### 7.1.3. 労働市場均衡



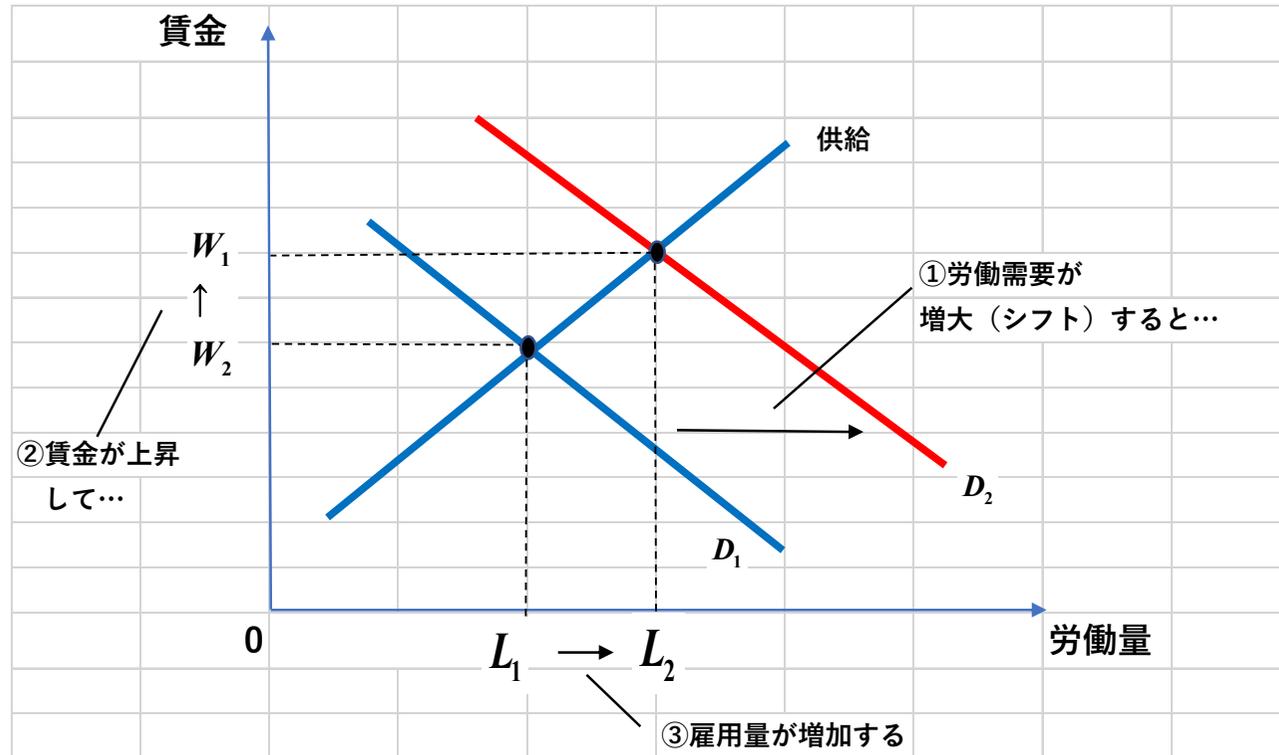
## 労働供給曲線のシフトが市場均衡におよぼす効果



あるシフト要因は様々な労働市場に異なる影響を与える

- 例： 移民が農業で働く → 農業労働供給曲線右にシフト →  $W^A$  ダウン  
 移民の患者増える → 医者需要曲線右にシフト →  $W^M$  アップ  
 移民の生徒増える → 教員需要曲線右にシフト →  $W^T$  アップ

## 労働需要曲線のシフトが市場均衡におよぼす効果



## 重要な関係式

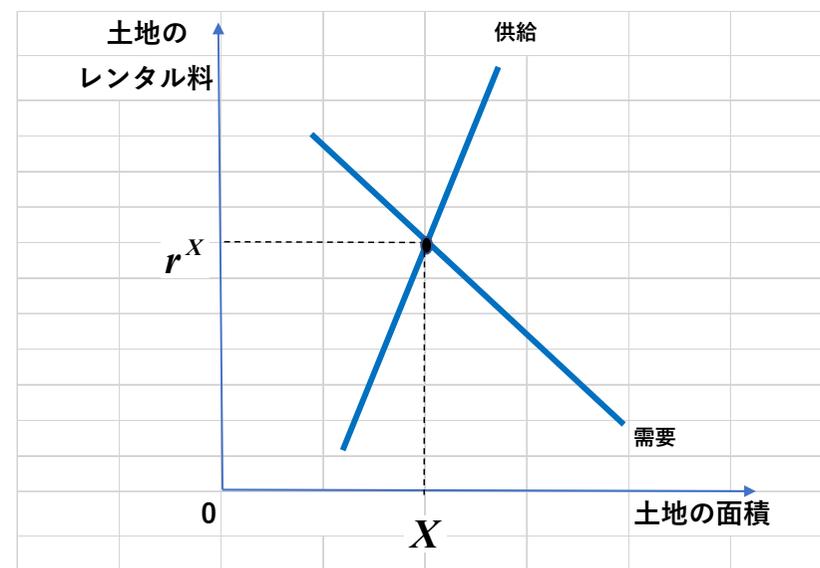
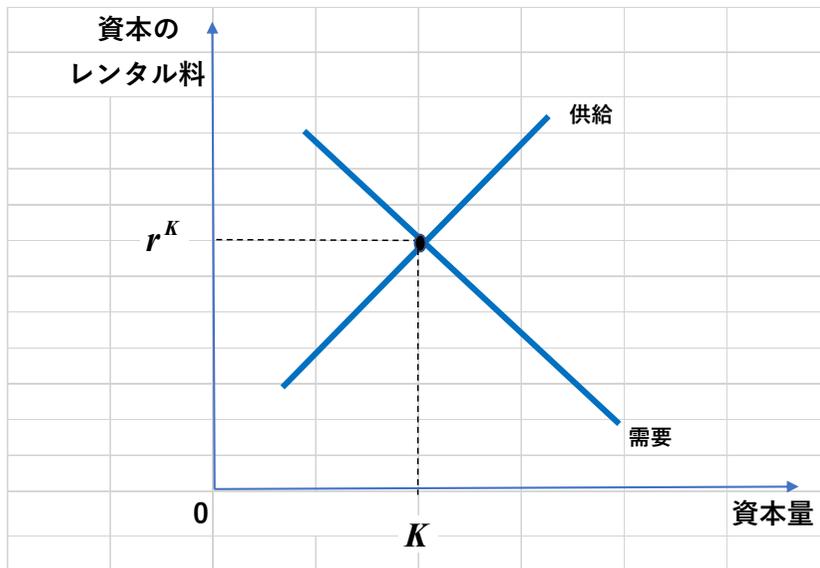
$$\text{「均衡賃金 } W \text{」} = \text{「労働限界生産物価値」}$$

任意の産業において労働限界生産性が向上すると  
当該産業の賃金が上昇する

特定の産業の賃金低い：  
その産業における労働生産性が低い可能性大

## 補論：他の生産要素：

### 資本、土地のレンタル市場



生産要素のレンタル価格 = 生産要素の限界生産物価値

生産関数  $Q = F(L, K, X)$

利潤（固定費用省略）：

$$pF(L, K, X) - wL - r^K K - r^X X$$

L、K、X について利潤最大化：

$$\max_{L \geq 0, K \geq 0, X \geq 0} \{pF(L, K, X) - wL - r^K K - r^X X\}$$

## 利潤最大化の一階条件：偏微分を用いて表される

偏微分とは？

他の変数を所与として一つの変数だけを限界変化させたときの値の変化分

$\frac{d}{dx}$  ではなく  $\frac{\partial}{\partial x}$  と表記

(「ラウンド・ディー」と読む)

例：  $y = f(x_1, x_2, x_3) = x_1x_2 + 5x_3$

$$\frac{\partial f(x_1, x_2, x_3)}{\partial x_1} = x_2, \quad \frac{\partial f(x_1, x_2, x_3)}{\partial x_2} = x_1, \quad \frac{\partial f(x_1, x_2, x_3)}{\partial x_3} = 5$$

利潤最大化の一階条件：

$$\cdot \frac{\partial}{\partial L} \{pF(L, K, X) - wL - r^K K - r^X X\} = p \frac{\partial}{\partial L} F(L, K, X) - w = 0 :$$

$$w = p \frac{\partial}{\partial L} F(L, K, X)$$

賃金 = 労働限界生産物価値

$$\cdot \frac{\partial}{\partial K} \{pF(L, K, X) - wL - r^K K - r^X X\} = p \frac{\partial}{\partial K} F(L, K, X) - r^K = 0 :$$

$$r^K = p \frac{\partial}{\partial K} F(L, K, X)$$

資本のレンタル価格 = 資本限界生産物価値

$$\cdot \frac{\partial}{\partial X} \{pF(L, K, X) - wL - r^K K - r^X X\} = p \frac{\partial}{\partial X} F(L, K, X) - r^X = 0 :$$

$$r^X = p \frac{\partial}{\partial X} F(L, K, X)$$

土地のレンタル価格 = 土地限界生産物価値

### 一般均衡効果：

労働市場、資本（機械、工場）市場、土地市場は相互に関連している

- K** の供給ダウン → 資本のレンタル価格  $r^K$  アップ
- K** の供給ダウン → 労働の限界生産物価値  $p \frac{\partial}{\partial L} F(L, K, X)$  ダウン
- 労賃  $w$  ダウン
- K** の供給ダウン → 土地の限界生産物価値  $p \frac{\partial}{\partial X} F(L, K, X)$  ダウン
- 土地のレンタル価格  $r^K$  ダウン

## 補論

「土地や資本を購入する」と「土地や資本をレンタルする」ことは  
厳密に区別して考えよ！

土地、資本（工場、機械）を所有する、しない：  
機会費用とは無関係

土地、資本を生産期間中レンタルする（あるいは使用する）：  
レンタル料の支払い発生  
機会費用に関係

## 7.2. 格差と差別

### 7.2.1. 賃金格差

様々な仕事間で賃金格差 Why?

仕事ごとに労働限界生産物価値がことなるから

なぜ仕事ごとに労働限界生産物価値が異なるのか？

補償賃金格差： 働くことによる直接的な効用、不効用  
つまらない仕事、危険な仕事は賃金高め  
面白い仕事、危険でない仕事は安め

人的資本： 過去に技術や知識を蓄積してきた（教育投資）  
人的資本の高い人と低い人は区別されるべき  
熟練、非熟練  
正規、非正規

賃金格差は日本の社会問題

## 7.2.2. 差別

人種、民族、性別、年齢ごとにことなる賃金 Why?

補償賃金格差、人的資本だけでは説明できない要因があるのでは？

あるいは

そもそも人的資本の違い（教育水準の違い）が生じるのは  
「差別」が根本原因ではないか？

今日の **OPEN QUESTION**

## 差別と利潤動機との関係

- ・ 事業主による差別： 利潤動機を優先する事業者は差別を解消してくれる
- ・ 顧客による差別： 利潤動機を優先する事業者は差別を助長しかねない
- ・ 政府による差別： 政府が差別や偏見にもとづく政策をとる  
(差別にもとづく政策の方が国民の支持得られやすい)  
隔離政策。特定の人種を店に入れない、雇わない。  
政治的な競争制限が差別を助長することも

## 7.3. 貧困

### 公平と効率のトレードオフ

「所得不平等は所得再分配をして解消すればいい？」

→ 「高額所得者も貧困者も労働のインセンティブ失うから問題だ」

- cf.** 貧困
- 犯罪の発生率アップ
  - 社会厚生の低下
  - この場合富裕層は貧困対策に積極的になりうる

## 政治哲学

「貧困や不平等対策をどのように考えるべきか」

### ・ 功利主義（ベンサム、ミル）

最大多数の最大幸福： 人々の幸福度（快樂、効用）の総和が最大になるように配分せよ

効用の個人間比較： 経済学（効率性中心）ではあまり使われない  
欠点：客観的な基準が存在しない

功利主義には貧困問題の解決の糸口（の一つ）がある：

水一杯： 富裕層には無価値  
貧困層には高い効用

- ・ リベラリズム (ロールズ)

政治的決定の現場では、裕福な政治力ある人の意見が勝ってしまう  
こんな状況でも貧困を政治的決定に反映させることができるのか？

無知のヴェール：

富裕層は、自分がどれほど恵まれていたかをよく考えて、まだその幸運に恵まれていない「原初状態」に立ち返って、社会の望ましさを判断せよ

立場や偏見にとらわれない「リベラル」な視点

持続可能な社会：

生まれていない未来世代の社会厚生をいかに「今」考慮することができるか？

- ・ リバタリアニズム（ノージック、セン）

「結果の平等」は追及するべきでない：

自由の侵害にあたる

「機会の平等」を追及せよ： 差別、偏見との戦いに直面する

福祉の経済学

潜在能力（**Capability**, セン）

第7章（A1）終わり

宿題（7）を提出すること